

ソフォクレス作『アンティゴネ』～その考察と翻訳～

神澤 和明

The Research on and Translation of "Antigone" by Sophocles

Kazuaki KAMIZAWA

The ancient Greek tragedies have ever been the basis of European (and American) plays and influenced many great people in various cultural field. The very common and most characteristic theme of Greek tragedies is the serious conflict between humans and gods (in other words, the fate). In works by Aischylos the power of gods is absolutely strong and humans can only obey their strict and cruel fate. In the plays of Sophocles, the gods are still "absolute" being, but human characters try to act according to their own thoughts and intentions. We can find in his works the development of respect to humans themselves. With this recognition, I translate and reconstruct one of his masterpieces, "Antigone", and expect it to be actually performed by some theatre company.

1. 緒 言

古代ギリシアに生まれ、大いに繁栄をみたギリシア悲劇は、欧米演劇の基礎として厳然と存在している。現代の演劇も、その根につながるものとして認められている。

私はこれまで、専門分野であるシェイクスピアの戯曲に関して、その何作かの悲劇、喜劇を翻訳した。また地域貢献の活動として、アマチュア劇団が上演可能なようにアダプテーションを施した上演脚本を作成して、奈良高専の所在地である奈良県下の複数の市民劇団によって、実際に上演を行ってきた。行政の協力を得て行われたこれらの舞台は、その二つがテレビ局によって放映され、また一つの上演台本が、演劇専門誌に掲載されている。

今、シェイクスピア劇の底にあるものとして、ギリシア悲劇をあらためて研究しようと考えた。中学時代に現存するすべての作品を読んではいしたが、経験を積んだ演劇学の研究者、舞台の実践者となった現在、読み直しをするべき時期だと感じたからである。そしてそれを、シェイクスピア劇の場合と同じく、アマチュア劇団にも上演できる「生きた戯曲」として作り上げてゆきたいという、強い意欲をもった。一種の芸術的「先祖返り」と言えるかもしれない。ともかくも、この研究の目的は、古代ギリシア悲劇の内容、思想、構成を分析するとともに、現代戯曲としての翻訳台本を創作することにある。翻訳は、複数の英語訳を参照して行った。

2. ソフォクレス作『アンティゴネ』についての考察

2.1 作品の歴史

古代ギリシアの三大悲劇詩人のひとり、ソフォクレス(BC496頃～BC406)はその生涯におよそ123篇の悲劇を書いたといわれる。大ディオニュシア祭(アテネの国家行事として毎年開催された演劇コンクール)での優勝回数24回は、大詩人の先輩・アイスキュロス、後輩・エウリピデースと比べて圧倒的に多い。現存する作品はわずか7編であるが、古今の傑作である『オイディプス王』(BC429年頃)を始めとする作品群は欧米文学に影響を与え続けて、彼が優れた劇作家であることを我々に知らしめている。

『アンティゴネ』(BC441頃)は彼の50代半ばの作品であり、その緊迫した構成や、情感ある描写が薫る詩句の表現に、作家としての成熟がうかがえる。主要人物たちの心の揺らぎも的確に表されている。ギリシア演劇の特殊性が制約となるために、舞台上演の回数は多くはないが、劇文学として各国で読み継がれてきた。そして一連の「オイディプス伝説」の終結部として有名である。

ソフォクレスは「オイディプス伝説」に従って3つの作品を書いている。背景となる事件の時間的経過は、『オイディプス』『コロヌスのオイディプス』『アンティゴネ』となるが、創作は『アンティゴネ』が最も早い。これは興味深いことである。

具体的に述べるならば、戯曲『アンティゴネ』において、戯曲『オイディプス』との精神的関連は極めて薄い。オイディプスの悲劇は、主人公アンティゴネを取り巻く、現在の状況を創り出したものであるが、その扱いは「出来事」として第三者的に見られており、オイディプスという人物像はどこにも浮かび上がってこない。一方、戯曲『オイディプス』においては、その主人公、オイディプスは積極的に、神の与えた運命に立ち向かい、自らの意志と努力によって事態を切り開こうとする。そこには戯曲『アンティゴネ』のヒロインとの共通性が、くっきりと見て取れる。『アンティゴネ』に登場するクレオン、ティレシアスが権力者、予言者として強い影響力をもつ人物に描かれているのに対して、『オイディプス』に現れる彼らは、主人公の意志を動かすことができない。そして次の『コロヌスのオイディプス』においては、晩年を迎えたオイディプスは既に神（絶対的力）と戦うことをやめ、人間の欲や野心、偽りを厭いながら、あきらめの境地に達している。この『アンティゴネ』→『オイディプス』→『コロヌスのオイディプス』という流れの底には、作者の思想が見えてくる。

暗黒の中世を過ぎ、ルネサンスから近世において、ギリシア劇が見直されるようになった。そして、若い娘という弱い存在であるアンティゴネが、自分の意志で権力に反抗して敢えて死を迎えるという物語は、人間精神の自立を重要視する近・現代において、読み直されることが多かった。この物語を、たとえば哲学者・G.W.F. ヘーゲル (1770 ~ 1831) はその著書、"Phänomenologie des Geistes" (1807) において、アンティゴネを「人間意識の客観的段階の一つである人倫の象徴」として分析している。

彼女に限らず、ギリシア悲劇の登場人物たちは、哲学、社会学、心理学においてしばしば引用されることがある。たとえば「母親を過度に愛するが故に、父親を憎悪する息子」の心理を表現する「エディプスコンプレックス」はオイディプス、「父親を過度に愛するが故に、母親を憎悪する娘」の心理を表現する「エレクトラコンプレックス」は、やはりギリシア悲劇の有名なヒロイン、エレクトラに由来しているのはよく知られている。

アンティゴネに限ってみても、20世紀に入ってフランスの劇作家、ジャン・アヌイは、彼女を「ジャンヌ・ダルク」に通じる人物として描いた『Antigone (アンティゴヌ)』(1942) を発表し、ドイツの劇作家、ベルトルト・ブレヒトは、ヘルダーリンのドイツ語訳に基づいて、圧政・非情な権力に立ち向かう女性を描く『Antigone (アンティゴネ)』(1947) を発表している。いずれも評判の高い作品でしばしば上演されている。他に、フランスの天才ジャン・コクトーにも『Antigone』(1922) があるが、

評判になってはいない。

2.2 その物語

オイディプス伝説は、テーバイの支配者であり、龍の子孫と言われるカドモス家の物語である。アポロンの恐ろしい神託から免れようとして、かえってその予言通りに、知らずして父親を殺し、母親と結ばれてしまった、オイディプス王の広く知られた悲劇を、詳しく記すには及ばないだろう。自ら両眼を貫いて盲目となったオイディプスは、幼い娘たち（アンティゴネとその妹のイスマエネ）に手をひかれて、放浪の旅に出る。アテネの英雄王、テセウスに助けられ、コロヌスの地で終焉を迎える彼は、自分を見捨てた二人の息子、ポリュネイケースとエテオクレースに、ともに殺し合って滅びるという呪いをかけた。その予言は達成される。エテオクレースに裏切られ、テーバイを追放されたポリュネイケースは、敵国であったアルゴスと結んで、テーバイの王位を奪回するため攻め寄せてきた（このいきさつは、アイスキュロス作『テーバイに向かう七将』に描かれている）。テーバイを取り巻く城壁の七つの門で、両軍の将兵はぶつかり合い、ポリュネイケースとエテオクレースは互いの剣に貫かれて、相討ちに果てた。その結果、オイディプスの義弟（彼の母にして妻であるイオカステの弟）で、エテオクレースの後見役を務めていたクレオン（アンティゴネの叔父にあたる）がテーバイの支配者となる。なお、念のために付け加えると、アンティゴネはテーバイ王家の血を引く存在だが、クレオンはそうではない。

王となったクレオンはその最初の仕事として、テーバイのために戦ったエテオクレースの亡骸は儀式通りの葬儀を行ったが、敵となったポリュネイケースは荒野にうち捨て吊うことを禁じた。そしてここから、ソフォクレス作『アンティゴネ』の物語が始まる。

アンティゴネは禁令に背き、ポリュネイケースの死体を葬る。彼女は統治者が下した命令よりも、近親の者の魂を安んじるという神の掟を重んじたのだ。クレオンは怒り、造反者に死刑を宣告する。アンティゴネの許嫁であった、クレオンの息子・ハイモンの弁護も聞き入れられない。テーバイの市民たちに見送られ、彼女は墓場への路をたどってゆく。しばらくして現れた予言者、ティレシアスの恐ろしい言葉にたじろいだクレオンは、心を変えて、アンティゴネの命を助けようとする。が、時は既に遅く、アンティゴネは閉じ込められた岩屋の中で首をくくり、そのわきでハイモンも自刃して果てた。その知らせを聞いたクレオンの妻も嘆きのために死ぬ。そしてクレオンはただひとり、絶望の中に残されるのだった。

アンティゴネはたしかに、悲劇の人物である。しかし

この戯曲を読むとき、同時にクレオンもまた、哀れな人物と思わざるを得ない。人間社会の掟に背いた娘と、神の掟を押さえ込もうとした男。彼らのいずれが、より罪深く、不幸なのか。容易には答えられない疑問であろう。

2.3 ソフォクレスの意図

一般論として、ドラマのテーマとは、一言で言えば「葛藤・対立」である。そして最も感動を呼ぶのは、人間が人間以上のものに対して挑む姿を描いたドラマである。

それは神や運命と個人との対立として描かれ、近代以降は社会と個人の対立という形でしばしば表現されてきた。また日本では、能楽においては「無常」という世界観が個人との対立項（無限と有限の対立）として存在し、浄瑠璃や歌舞伎では「個人＝人情」に対立するものとして「制度」や「世間＝義理」というものが置かれていた。

古代ギリシアにおいて考えるならば、ソフォクレスに先んじたアイスキュロスの場合、人間に対立して存在するのは絶対者としての神であった。人間は神の定めた宿命から決して逃れることができず、悩み苦しむ彼らは神に許しを乞い、救いを求めるしかなかった。

ソフォクレスの作品においても、神の力は絶大である。神が下す神託は必ず達成され、人はその運命から逃れることはできない。ただし、ソフォクレスの作品における登場人物たちは、神の決めたことをそのまま受け入れることをしていない。たとえばオイディプスは、父を殺し母と結婚するというアポロンの神託を覆そうとして、父母のもとを去った。残念ながら、彼はその両親が自分を捨ててくれた養い親だということを知らなかったために、思いとは逆の結果に至ってしまった。オイディプスは神を出し抜こうとしたのではない。彼は「自分に下された理不尽な運命を、ただ黙って受け入れること」を拒んだのである。ソフォクレスにおいて、神が絶対者であることは変わらないが、人間はより積極的に、運命に立ち向かう意志をもった存在としてとらえられる。彼・彼女らは自分が納得できる生き方、死に方をしようとする。アンティゴネにおいても、彼女の運命、死の宣告を呼び込み、受け入れるのは、彼女自身の考え、意志なのである。

ソフォクレスの後にくる（没年は同じだからライバルとも言えるのだが）エウリピデースにおいては、さらに個人の意志が重要な要素になってくる。彼の作品の登場人物たちの対立相手は時として、神である以上に、人間である。その悲劇のほとんどは、人間の欲望や強い情熱、愚かさや不正によって生み出される。人間の営みの裏に神は大きく存在しているけれど、今の状況を作り出し、それを進めてゆくのは人間同士の対立なのである。その点で、エウリピデースはきわめて近代的な芸術家であり、

先立つ二人の偉人とは異なっている。

2.4 作品の構成

ギリシア悲劇は普通 12～15 名からなるコロス（歌舞合唱団）と、2～3 名の演技者によって演じられる。ソフォクレスの場合は、コロスは 15 名、演技者は 3 名であったようだ。役の数が 3 名より多い場合でも、演技者の数は変わらない。従って、1 人の演技者が複数の役を兼ねることになる（これはシェイクスピア劇や歌舞伎でも同じだ）。それも 1 人何役というだけでなく、役の出入りの都合で、同じ役を 2 人の人物が分けて演じることもある。演技者は大きな仮面をつけて演じ、役を表す特別な衣装もなかったので、問題はなかったようだ。

『アンティゴネ』では同時に 3 人の人物が登場して対話する場面があるので、演技者が 3 名より少ないことはあり得ない。私が考えるところでは、『アンティゴネ』の場合、演技者 A：クレオン、演技者 B：アンティゴネ／ハイモン／エウリディーチェ、演技者 C：イスメネ／番人／ティレシアス／伝令、という役割であろう。演出家の立場から香盤表（役者の出入りを示すグラフ）を作ると考えると、これが最も役の出入りがスムーズである。もしこれが正しければ、主人公であるアンティゴネの演技者が複数の役を兼ねるのに対して、脇役であるクレオンは一人の演技者が演じ通すということになる。これは演劇の常識からみると不思議な感じがする。実を言うと私は、この芝居はクレオンの悲劇なのではないかと考えている。それならば、このことは決して不思議ではない。

演技者はいわゆる台詞の遣り取りを行って筋を展開し、コロスは歌や舞踊を演じることで、上演の情緒的興味を盛り上げていた。このような歌舞団が存在したのは、ギリシアにおける演劇がもともとは（ディオニュソス）神に捧げる儀式として発生し、次第に芸術的に発達していったためだと考えられている。従ってコロスは本来は劇世界の外にいたのだが、次第に劇の登場人物としての役割をも担い、演技者との対話も行うようになっていった。エウリピデースにおいてはそれがさらに進み、コロスそれぞれが登場人物として性格を持っている作品さえある。

さて、ギリシア悲劇は基本的に次のような要素で構成されている。

プロロゴス（序詞）：

冒頭に登場人物たちが、その芝居の状況を説明する。

パロドス（登場歌）：コロスが登場する時に歌われる。

エペイソディオ（挿曲）：登場人物たちによる対話。

スタシモン（歌舞）：コロスたちが歌い踊る。

エクソドス（退場歌）：終結部、コロスたちが退場する。

このように、プロロゴスからエクソドスまでの間、エ

ペイソディオンとスタシモンが繰り返されながら、芝居は進んでゆくのである。

エペイソディオンは多くの場合、登場人物同士の議論の場となっている。そのため、事件は「起きる」ものであるよりも、「語られる」ものとして進行する。そして登場人物の感情を伝えることよりも、彼らの主張を述べることを主にしている。それは会話である以上に、互いに提出する命題に対しての議論の印象を与える。いかにも議論好きな古代ギリシア人らしいと言えよう。

スタシモンは合唱による詩である。芝居の展開の裏にある出来事を超越者の立場から述べる叙事詩の場合と、芝居の登場人物（この場合はテーバイ市民）として、この悲劇に対する心情（それはまた観客の心情とも同調するのだが）を述べる叙情詩の場合とがある。いずれもアクションの進行を停止させて、観客の代理人でもあるコロスの心情を直接に伝える場面である。

ソフォクレス作『アンティゴネ』の場合、アンティゴネとイスメネが登場するプロロゴスから舞台は始まる。そしてエペイソディオンとスタシモンは5回ずつ繰り返される。その登場人物たちは、

- ①番人とクレオン、
- ②クレオンとアンティゴネ、イスメネ、
- ③クレオンとハイモン、
- ④クレオンとティレシアス、
- ⑤エウリディーチェと伝令、である。

それ以外に、コロス集団とクレオン、アンティゴネ、ティレシアス、伝令がそれぞれ対話する場面も含まれる。

スタシモンには、登場人物とコロスが応答歌を歌う部分も含まれる。たとえば、墓場へ向かうアンティゴネとコロスたちの、叙情的な長い応答歌がそれである。

このようにギリシア悲劇は詩劇でありかつ、歌舞の要素が極めて強い演劇である。その点で、日本の能楽に共通するものがあると言えよう。

余談になるが、イタリアにルネサンス運動が起こった時、その第一の動きはギリシアの演劇を再現しよう（戻ろう）というものであった。その結果生まれたのが、オペラという芸術形式である。

2.5 翻訳および台本の構成について

今回、ソフォクレス作『アンティゴネ』を翻訳するにあたっては、ペンギンブックスの英訳に基づき、その他の英訳も参考にした。

これまで述べてきたことから、登場人物たちの対立場面であるエペイソディオンは、丁々発止の議論という気分を出すことを目指し、テンポの速い、簡潔な散文に訳すことを心がけた。

一方、コロスによるスタシモンは、歌われた詩であることを考え、律動感を重視した韻文的な訳を行った。これはパロドス、エクソドスでも同じである。また、岩屋にひかれてゆくアンティゴネとコロスの間に交わされる長い感傷的な部分は、互いに歌い合う場面であることがわかるので、感情が現れてくるように考慮した。

まず、全訳を行い、その後、地域のアマチュア劇団で上演可能な台本に作り直すため、内容をなるべく削らないまま、全体の長さを縮めた。また、現代の観客には理解できないであろう、ギリシアの神話や伝説に基づく言い回しは、削除したり、別の表現に変えたりという作業を行った。複数の人物を一人にするということも行った。人物の呼び名は、舞台上で朗読する場合に、聞き取り易いものにした。人名でたとえば「アンティゴネー」と伸ばしたのも、そのためである。

結果として作成したのが、次に掲載する脚本である。原作＝作者の意図を損なうことなく、地域の市民劇団にも上演可能（観客にも理解され楽しめる）な脚本であると確信している。

参考文献

- *The Three Theban Plays* translated by Robert Fagles. Penguin Classics
 - *The Complete Sophocles: The Theban Plays (Greek Tragedy in New Translations)* translated and noted by: Peter Burian, Alan Shapiro
 - 「ギリシア悲劇全集第3巻 ソポクレス I」(岩波書店刊)『アンティゴネー』(柳沼重剛訳),『オイディプース王』(岡道男訳)『コロノスのオイディプース』, (引地正俊訳)
 - 『アンティゴネー』 呉茂一訳、岩波書店刊
 - 『Phänomenologie des Gesites 精神現象学』ゲオルク・ヘーゲル著、檜山欽四郎訳、平凡社刊
 - ブレヒト戯曲全集別巻『アンティゴネ』岩淵達治訳、未来社刊
 - アヌイ作品集第3巻『アンティゴヌ』芥川比呂志訳、白水社
 - 「ジャン・コクトー全集7 戯曲」『アンティゴネ・ソフォクレスによる』三好郁郎訳、創元社刊
 - 現代の演劇第2巻「演劇の理論と歴史」木下順二、鈴木力衛監修、三笠書房刊
 - 『ギリシア悲劇 物語とその世界』 呉茂一著、教養文庫 その他
- *なお、台本として再構成する以前の、研究者による全

訳を求められる方があれば、連絡をいただきたい。

『アンティゴネー』

ソフォクレス作／神澤和明訳・構成

登場人物

アンティゴネー	テーバイの前王オイディプスの娘
イスメーネ	その妹
クレオン	テーバイの支配者
エウリディーチェ	クレオンの妻
ハイモン	その息子、アンティゴネの婚約者
伝令	
ティレシ阿斯	盲目の預言者
コロス	テーバイの市民たち

《1》

アンティゴネー イスメーネ。今となってはただ一人の大事な家族。父様のオイディプス王の過ちのために、ゼウス大神は私たちに、あらゆる苦痛や嘲りを与えてこられた。今度は新しく王になったクレオンの叔父様が、テーバイ中に触れを出したというわ。聞いている？

イスメーネ お姉様、一言も。お兄様たちが相打ちして亡くなられ、アルゴスの軍勢が去っていったのは、つい昨夜。それ以上は何も知らないわ。

アンテ やはりね。だから門の外まで来たのよ、誰にも聞かれないように。

イスメ 不吉なことなの？

アンテ クレオンは私たちの二人のお兄様を、一人は名誉ある埋葬をさせながら、もう一人は埋めることもせずにいるわ。エテオクレスは、決まり通りに土に埋められ、死者たちと名誉をともにしている。でもポリュネイケースの遺体は葬ることも悼むことも許されず、鳥がついばむのにまかせておくと、宣告がされたという。それだけじゃないわ、これに従わない者は誰であっても、公衆の面前で石打ちの刑に処せられるとか。さあ、あなたが気高い生まれなのか、それとも気高い血筋に生まれただけの卑しい娘なのかを示して頂戴。

イスメ 今更、何ができるの？

アンテ この手で亡骸を葬るのを手伝ってくれる？

イスメ お兄様を埋葬するつもり？ テーバイ中の人間に禁じられているのに。

アンテ 私はお兄様に対してなすべきことをするわ。あなたにも兄様でしょう。見捨てることができる？

イスメ 少しは考えて。お父様は自ら暴いてしまった罪のために、両方の目を突いて盲目になられた。その母

にして妻になられたイオカステーは、首をくくって亡くなられた。そして二人のお兄様は、一日のうちにお互いが兄弟の血にまみれて殺し合われた。今度は私たちの番。もし法に刃向い、王の宣告を軽くみたりしたら、もっと惨めな死をとげるかもしれない。いえ、何より忘れてはいけないわ。私たちは女に生まれついているの。男の人と争ったりなんかできやしない。私たちは力をもった人たちに支配される。どんなにつらいことであろうとも、素直に従わなければならないのよ。

アンテ いいわ、無理じいはしない。私はお兄様を埋葬する。そのことで死刑になっても結構。

イスメ ああ、私がどんなに心配しているのか、わかってほしいわ。

アンテ 私の心配より、自分の運命を考えなさい。

イスメ 身も凍るような行いを、燃える心でなさるのね。

アンテ それ以上言わないで。この愚かな行いは私だけのことで、不吉な出来事に苦しむのも私だけ。私にとって、卑劣な死ほど我慢できないものはないのだから。二人は別々に退場。

テーバイの長老たちからなるコロスが登場する。

《2》

コロス テーバイの七つの門に陽の光が輝く。黄金の瞳がディルケの流れを照らす。白い盾をもった戦士らが甲冑に身を固め、隣国アルゴスから押し寄せてきた。

コロス長 王位を求めるポリュネイケースの、不当な要求を理由として、我が国土に押し寄せた。鷹のごとく鋭い、雄叫び声を上げ、雪のように白い、翼を広げて、この国をめがけて、舞い下った。

コロス1 わが七つの門を、血に飢えた槍を抱えて、敵どもは取り囲んだ。しかし彼らは、逃げ去ったのだ。打ち勝つことは難しかろう。竜の子孫の我々を、敵に回したのだから。

コロス2 七人の将が七つの門で、雄々しく敵将を押し返した。その中に、狂おしい宿命を負う二人がいた。彼らはともに、一人の父と母から生まれた者だ。敵をひしぐその槍を、兄弟は互いの身体に突き通し、死の定めを分かち合った。

コロス3 勝利の神が来られたのだ、あまたの戦車をもつ我がテーバイの国へ。ゼウスに貢ぎを捧げよう。昨日までの戦を忘れ、神々とともに踊り、祝おう。

コロス クレオン殿が来られた。神々が与えられた運命によって、新しい支配者になられた方だ。われら長老たちを呼び集め、どのようなことを提案なさるのか。クレオンが登場する。

《3》

クレオン 我がテーバイの長老方。皆さんは常に変わら

ず、この国に忠誠を尽くしてこられた。先王のオイディプスが身を滅ぼし、その息子らが互いの血にまみれ倒れた今、死者に最も近い身内である私が、王座と王権とを受け継ぐことになった。国よりも自分の身内を大切に扱う者がいれば、その者を私は軽蔑する。それが、この国の偉大さを守るための法律である。それにあわせてのことだ、オイディプスの息子たちに関して、私が国民に示した布告は。エテオクレスは、我が国のために戦って倒れた。それゆえ栄誉ある武勲につつまれて、彼は墓におさめられ、永久の眠りにつく。しかしその兄弟であるポリュネイケースは、追放の身から舞い戻り、父祖が治めた町を焼き尽くそうとして攻め寄せてきた。この男については、誰も追慕したり悼んだりすることは許されない。葬られないままうち捨てられ、犬や鳥のむさぼるにまかせ、無惨な恥をさらさせるのだ。

コロス長 あなたは権力をおもちだ。望まれる命令は何でも下すことができる、死者にも生者にも。

クレオ 諸君にはこの掟の番人となってもらう。

コロス長 どのような役目を、我らに求められる？

クレオ たとえ、この宣告に逆らう者があっても、それを助けまいとほしいということだ。

コロス長 死を覚悟して逆らう愚か者はおりますまい。

《4》

伝令がアンティゴネーを連れて登場。

コロス この娘を知っているぞ。アンティゴネー。おお、哀れな娘。哀れな父親の子供。何をして捕まったのか？

クレオ なぜこの娘を連れてきた？

伝令 埋めてはならぬと王様が禁じられた死体を、この娘が埋めておりました。

クレオ その場で捕まえたのか？

伝令 巣からひながいなくなっているのを見つけた小鳥のように、鋭い声で泣き叫んでおりました。そして儀式通り、青銅の水差しを高くかかげ、清らかな水を死体に三度注ぎました。それを見て、すぐに取り押さえました。

クレオ おまえはこのことをしたと言うか、それとも、しないと言うのか。

アンテ いたしました。否定はいたしません。

クレオ 埋葬を禁じる触れを知らなかったのか？

アンテ 知っていました。当然でしょう。国中に回っていたのですから。

クレオ それでは、あえて法を犯したわけだな。

アンテ ええ。触れを出されたのはゼウスではありません。決して過つことがない天の掟を、死すべき者が乗り越えることができましょうか。神々の掟は今日や昨

日のものではなく、いつの時代にも存在します。いつ出来たのか知っている者すらいない。神々の前でその掟を破った言い訳をすることなど、私にはできません。あなたのお触れがなくても、私はいずれ死なねばなりません。この運命に出会うことは、些細な嘆き。でも、兄弟が亡くなって埋められもせずにいるのを我慢するのなら、その方がよほどつらいことです。

コロス この娘は強情だ。困ったときに頭を垂れるやり方も知らない。

クレオ おまえは他のテーバイ人とはまったく違って、そんな見方をすると。

アンテ この人たちも同じです。あなたのために舌をこわばらせているだけ。

クレオ 彼らと違う行いをして、恥じないのか。

アンテ 兄弟を追悼することに、何の恥じることはありません。

クレオ 彼と戦って死んだ者も、兄弟ではないのか。

アンテ もちろん、同じ両親から生まれた兄弟ですわ。

クレオ ではなぜ、その兄の目からは不敬と思えるような行為をなす？

アンテ 死んだ者はもう、そんな不平を言いません。

クレオ 一方はこの国を滅ぼそうとした。しかるに一方は、国を守って倒れたのだ。

アンテ どのように死のうと、あの世ではこうした儀式を求めています。

クレオ 敵は味方にはならぬ。たとえ死んでいようと。

アンテ 憎しみではなく愛することが、私の生まれつきなのです。

クレオ では、死者の国に行くがよい。愛情が必要なら、彼らを受するが良い。

イスメーネが出てくる。

《5》

コロス イスメーネがやってくる。眉根に雲のかげりが見える。くすんだ頬を、涙の雨が汚している。

クレオ おまえがこの埋葬で果たした役割を白状するか、それともすべてをあずかり知らぬと誓うのか。

イスメ 私もいたしました。罪の重荷をともに背負いたく思います。

アンテ いいえ、あなたは同意しなかった。私も片棒をかつがせなかった。

イスメ お姉様、私を拒まないで。あなたと一緒に死なせて。

アンテ 私と一緒に死ぬなんてやめて。手を着けなかった行いをしたと言い張るのもだめ。

イスメ では、どんな人生がわたしにとって大切になるの、あなたに残されて。

アンテ クレオンにたずねなさい。あなたが気にしたのは彼の命令だった。

イスメ あなたと運命をともにできないの？

アンテ しっかりなさい。あなたは生きることを選んだ。でも私は、死ぬ運命を選んだのよ。

クレオ 娘たちの一人は改めて自分が愚かだと示した。もう一人は生まれた時からずっと愚か者だったが。

イスメ ええ、生まれつきが与えてくれた理性も、不幸が続けば狂ってしまいます。

クレオ 悪人とともに、悪事をなすと選んだときにな。

イスメ どんな人生を耐えられるでしょう、姉を失ってしまつては。

クレオ もう姉などと言うな。もはや死んでも同じなのだから。

コロス長 息子さんの許嫁を殺してしまうおつもりか？

クレオ 他に耕す畑がないわけでもあるまい。

コロス長 では、決まったようですな。彼女が死刑になることは。

クレオ 決まったとも。これからは女らしく、でしゃばらないようになるはず。大胆な男でさえ逃げようとするものだ、死神がその命を閉じさせにやってくるのを見てはな。

アンティゴネーとイスメーネ退場。クレオンが残る。

《6》

コロス長 ご息子のハイモン殿が、そこに。許嫁であるアンティゴネーの運命を嘆いておられる。欺かれた結婚の希望に苦い思いをもちながら。

ハイモン登場。

クレオ 息子よ、おまえは父親に腹を立ててやってきたのか。それとも私がすることは何にでも、同意を示してくれるのか。

ハイモン 父上、神々は人間に理性をお与えになりました。それは我々が持つものの中で最も尊いものです。あなたのおっしゃることが正しくないとは申せません。しかし他の者だとて、役に立つ考えをもつこともありましよう。あなたが顔をしかめられるのが恐ろしくて、市民たちはあなたの機嫌を損なうことを言うまいと気遣っています。しかし暗がりでは、この乙女のために嘆きの声を上げているのです。「どんな女だって、彼女の運命よりはました。身内のために栄光あることをなしたために、恥に満ちた死に様をしなければならぬのだから」と。父上、あなただけが正しいに違いないと、思わないでください。賢人ですら、時に応じて膝を屈することを、恥としません。

クレオ わしの年齢になった者が、こんな若造から物を教わらなければならないというのか。

ハイモ 私は若輩ですが、年齢ではなく、内容をお聞きください。

クレオ 不当な行為をする者に名誉を与えるのが良いというのか。

ハイモ 悪事を働く者を敬えと言うものではありません。

クレオ では彼女は悪疫に取りつかれていないのか。

ハイモ テーバイの民衆は声をそろえて、そうではないと言っています。

クレオ 自分ではなく、他人の判断でこの国を治めなければならんと言うか。

ハイモ 一人の人間にだけ属しているのでは、国家とは言えません。

クレオ 国家は統治者によって立つものだ。

ハイモ 砂漠となった国を治めるおつもりですか。

クレオ この小僧は、女の味方をするらしい。

ハイモ もしあなたが女なら。私はあなたの味方をしていのです。

クレオ 恥知らずめ。父親に面と向かって反抗するか。

ハイモ あなたが正義に反抗しているからです。

クレオ おまえの言うことはみな、あの女を弁護するためだ。

ハイモ そしてあなたと私を、です。さらには、黄泉の国の神々のために。

クレオ 決してあいつと結婚はできないぞ、墓のこちら側ではな。

ハイモ では彼女は死ぬしかない。そうなれば、その恋人もおしまいです。

クレオ 考えなしに利口ぶったことを後悔させてやる。

ハイモ あなたが父上でなかったら、愚か者と呼ぶところです。

クレオ 女の奴隷になりおって。おれをまるめこもうとしても無駄だ。

ハイモ 自分がしゃべるだけで、人の話を聞こうとはなさらないのですね。

クレオ 天上の神々にかけて、覚えておけ、こんな不名誉な悪口でわしの名誉を汚しおった。その報いをうけさせてやる。あの憎まれ者をつれてこい。花婿である、こいつの面前で死なせてやる。

ハイモ いえ、私のそばで死なせはしない、決して。

ハイモン退場

コロス長 行ってしまわれた、あんなに怒って。若者の心は、突き刺されると、凶暴になります。

クレオ ふん、分を越えて思い上がるが良からう。だがこの二人の娘を運命から救い出すことはできぬ。

コロス長 二人とも死刑になさるおつもりですか。

クレオ それだ。手を汚していない方は許してやろう。

クロス長 もう一人は、どのようにして死なせるお考えです？

クレオ 岩屋の中に生きながら閉じ込める。そこで冥府の王、ハーデスに祈っていればよい。あいつが敬う唯一の神だ。ひょっとすると死を免れるかも知れぬ。さもなくば、遅まきながら、死者を大切にすることが無駄な骨折りだったと思ひ知ることだろう。

クレオン退場。

《7》

クロス 愛はあまたの戦いに、負けたことがない。死せる身として、汝から逃れられる者はいない。

正しい心も汝によって、誤ったところへと追い立てられ、破滅してしまうのだ。

そして、後先を見ない愛の勝利が、神の法を越えて、権力者の地位を得る。

アンティゴネー登場。

クロス長 だが今は、涙を止めていられない。アンティゴネーが、あらゆる者を眠らせる、花嫁の小部屋へと、去ってゆくのを目にしては。

アンテ 私を見て。故国の市民のみなさん。最後の道を辿ってゆく私を。陽の光を見るのも、もうこれが最後。すべてのものを眠らせるハーデスが、私をアケロンの岸辺へと導いてゆきます。私には、花嫁を送る歌も歌われない。婚礼を祝う言葉も聞こえない。さびしく、三途の川の主に迎えられる私。

クロス 栄光と賞賛を受けながら、おまえは死者のいる深みへ旅立ってゆく。身を弱らせる病に冒されたのでもなく、剣に貫かれたわけでもない。おまえ自身の運命の主人として、命あるまま、ハーデスのもとへ過ぎゆく。他には誰も辿ったことのない旅路を。

アンテ おお、わがふるさと。ああ、ディルケーの泉、神聖なテーバイの土地。せめて、私の証人になってください。どんな風に、友人にも嘆かれず、お墓となった岩屋への道を辿っていったか。ああ、不幸せな私。この地上にもあの世にも、生きる者とも死せる者とも、ともに過ごすところはないのです。

クロス 権力に向けられた攻撃は、その力を守ろうとする者に、見過ごされることはない。おまえの情熱が、おまえの破滅に繋がったのだ。

アンテ お墓がこの花嫁の部屋。岩に刻んだ永遠の牢屋。そこへ私は、亡くなられた人たちを探しにゆく。誰よりも惨めに、命の終わりが来る前に。でも、私が来ることを、お父様が歓迎してくださる。お母様、お兄様も喜んでくださる。それだけが、今の望み。あなたたちが亡くなられた時、私はこの手で身体を洗って、帷子を着せてさしあげた。お墓に飲み物を注いであげた。

そしてああ、ポリュネイケース、あなたのお用いをしたために、こんなことになりました。仮に夫が死んでも、代わる者が見つかるでしょう。新たな子供も、授かりましょう。でも、父様と母様があの世に旅だたれてしまわれたら、もう兄と呼ぶ人は、私には授からない。クレオンはそれを誤りだと決めつけて、私を捕まえて引立ててゆきます。花嫁の新床も、婚礼の歌も私にはありません。結婚の喜びも、子供を育てることもできない。身近な人々から見捨てられ、不幸な私は生きながら、死の部屋へと連れて行かれます。神々のどのような掟に、私は背いたのでしょうか？ ああ、どの神様にも、私はもうおすがりできないのかしら？

クロス この娘の魂はまだ、激しく荒れているようだ。

アンテ お父様の町、テーバイの国よ。おお、私たちのはるかな祖先。ここから連れて行ってください、今すぐに。私をご覧ください。テーバイの長老たち。あなたたちの王の一族の、最後の娘です。私が誰のせいで、どんなに苦しんでいるのかをご覧ください。それもすべて、神への畏れを見捨てることを拒んだがために。

アンティゴネー退場。

《8》

盲目のティレシアスが少年に手をひかれて登場。

ティレシアス テーバイのお偉方たち、一人の目に二人で頼って、一つの道をやってきました。案内人の助けなしでは盲目は歩けませんでな。

クレオ 老齢の身で、ティレシアス、何かあったのか？

ティレ いつもの占いの座についておった。そこにはあらゆる鳥たちが集まってくる。その中に不吉な叫び声を聞いた。互いに殺し合っている声だ。すぐにわしは祭壇に火をおこし、生け贄を捧げた。しかし、わしの捧げ物から、火の神は炎をたてられなかった。我らの祭壇は一つ残らず、鳥や犬どもが食いちぎったオイデプスの不幸な息子の腐肉によって、汚されてしまった。神々はもはや、我らから祈りも生け贄もお受けにならない。よろしいか。人は誰でも過ちをおかしがちだ。しかし過ちが為されたときに、その償いをして改めるのなら、頑迷な者とは呼ばれまい。死者の求めを聞くが良い。あなたに良かれと思ひ、申し上げるのだ。

クレオ ご老人、あなた方、預言者はみな、弓の射手が的を狙うように、私に矢を射かけてくる。脅しつけて金を巻き上げようというのか。たとえゼウスの使いの鷲が、死者の腐肉をその支配者の玉座に運んでこようとも、その汚れを嫌って、彼を埋葬などせぬぞ。

ティレ では、よく聞かれよ。これから太陽の早い馬車の巡りを多くは見られまい、あなたの血肉をわけて生まれた者の一人を、死体に対する代償として差し出す

までにな。日の光を受けた子供を陰の中に押し込めて、不法にも生きてままの魂を墓場におさめたからだ。さらに冥土の神々に属するはずの者をこの地上に留め置き、その身体を埋めることも弔うこともせずにおかれた。それ故に、禍に報いを下す怒りの女神たちが、あなたを待ち受けている。すぐに人々の嘆く声が、あなたの家で聞こえてくる。そしてあなたへの憎しみの騒ぎが、すべての町々でわき起こるだろう。徴兵された若者たちが、犬や獣や鳥たちによって弔われ、死者の汚れた臭いを町へまきちらすだろう。この預言の矢を、私を怒らせたあなたの胸に射かけておこう。確かな矢だ、逃れることはできない。

ティレシアス、少年とともに退場。

コロス長 恐ろしい預言を残して、行ってしまった。王様、かつては黒かったこの髪の毛が白くなって以来、あの人物は我が国に対して、誤った預言をしたことはありません。

クレオ よく知っている。だから胸が騒いでいる。身をひくというのも腹立たしいが、刃向かって我が誇りを汚すことは、これも苦々しい選択だ。

コロス長 賢明なお考えを。

クレオ どうしたら良い？ 言ってくれ。

コロス長 あの娘を岩屋から出してやるのです、そして埋葬されていない死者を墓におさめることです。

クレオ わしに負けるというのか。

コロス長 それも急いで。神々が使われる禍は人間の愚かさを先んじられますぞ。

クレオ つらいことだが、自分が望んだ決意を取り消して、従うことにしよう。運命と無駄に闘うことはない。

クレオン退場。

《9》

コロス 多くの名前をもつ汝、カドモス家の花嫁の栄光、雷鳴とどろくゼウスの子孫。

名高いイタリアを睥睨し、統治する、そこではすべての客人が歓迎されよう。

輝きたいまつ火があった、二つの頂の上に。ナイサの丘の、つたの生えた斜面から、ぶどうが実る緑の海岸から、汝はやってくる。

汝の息は炎と燃ゆる星。おお、夜の声を支配する者。ゼウスの御子よ、現れよ。夜通し汝の前で踊って、祝福を与えよう。

伝令が下手から登場。

伝令 皆さん。定まったものとして褒めるにも非難するにも、人間の生には決まったことはないようですな。幸運は日によって、幸せな者や不幸な者を、助けることも見捨てることもあります。

コロス長 おまえが持ってきた新しい知らせとは何だ？

伝令 死の知らせです。そしてその死に責任がある、生きている者のことです。

コロス長 誰が殺したのだ。そして誰が殺されたのか？ 話せ。

伝令 ハイモン様が死にました。

コロス長 彼の父の手によってか。それとも彼自身の手で？

伝令 彼自身の手で。それも、その父親が犯した殺人を怒ってのことです。

コロス長 おお、予言がなんと正しかったことか。

不幸なエウリディーチェ、クレオンの后がそこに。宮殿から来られたようだが。ご子息の成り行きを聞かれたのか。

エウリディーチェが登場。

エウリディーチェ テーバイの皆さん。私はパラス女神にお詣りするため出発しようとしているときに、あなた方の言葉を聞きました。門のかんぬきを開けているときに、夫の嘆きを伝える声が私の耳に届きました。恐ろしさに打たれ、私はのけぞって腰元たちの腕の中に倒れ、正気を失ってしまいました。でも、もう一度言って下さい。どんな悲しみをも知っている者のように、それを聞きましょうから。

伝令 私は王様の案内役として、娘が閉じこめられている岩屋へと向かいました。死神の花嫁のために掘られた住まいです。するとその花嫁の小部屋で、大声で泣き叫ぶ声を聞きました。王様は苦悶の声でおっしゃいました。「心配したことが本当になった。わしを迎えているのは息子の声だ」。私たちはすぐ駆け出しました。そして墓の奥まった処で、娘が首を吊って死んでいるのを見つけました。若者は娘の身体を抱きしめて、死神に嫁いでしまった花嫁を嘆き、父親の仕業を嘆き、不幸な恋愛を嘆いていました。王様が近づかれ、「不幸な息子よ、正気を無くしたのか。こっちへ来なさい、頼む」とおっしゃった時、若者は一言も答えずに諸刃の剣を引き抜いて襲いかかってきました。王様は身をかかわされ、ねらいはずれました。不幸な方は怒りにまかせて、その場で刃に身を貫かせました。そして弱々しく乙女を抱かれ、彼女の青ざめた頬に、真っ赤な血潮をしたたらせました。死体が死体を抱いたのです。哀れな若者、彼は結婚の儀式を死神の広間で行われたというわけです。そして人間にとって、悪しき考えがどれほど、この上ない呪いとなってしまうかの、証人となられたのです。

エウリディーチェは宮殿に入る。

コロス長 これからどうなると思う？ 奥方は良いとも

悪いとも、一言も発せず、戻ってゆかれた。

伝令 わたしにも、わかりません。希望的に申せば、ご子息の悲しいお知らせを聞かれて、その嘆きを皆には見せまいとされたのでしょうか。家の中で、腰元たちと一緒に嘆きになろうというのでは。分別を持ったお方ですから、間違いはなさりますまい。

コロス長 わからぬぞ。わしには、黙っておられたことが、無駄に騒ぎ立てられると同様、不吉なことをはらんでいるように思われる。

伝令 ともなく、入ってみましょう。そして沸き立つ心の中に、何か押し殺した目的を隠しておられるのかを探ります。確かに、過ぎたる沈黙は危険な意味をもっておりますな。

伝令は宮殿に入る。

クレオンがハイモンの死体を抱いて登場。

《10》

クレオ 私たちを見ろ、殺した者と殺された者だ。私の分別のなさ故に、何という嘆きもたらされたのか。ああ、息子よ、おまえは若くして死んでしまった。おまえの愚かさではなく、わしの愚かさ故に。

伝令が出てくる。

伝令 王様、その手は空っぽではありませんまいが、さらにお持ちにならねばならないお荷物があります。お后様がお亡くなりです。今受けられた打撃がもとで、お気の毒に。

伝令退場。

クレオ おお、ハーデス。どれほど生け贄を受けても足りないのか。どこへなりと連れて行ってくれ。大急ぎで。生きてはいても、死んだも同然の男だ。

コロス そのお考えは正しいでしょう。もし良いことが悪いこととともにありえるのなら。道のりは短いほどよるしい、厄介ごとがその行く道にあるときには。

クレオン 来てくれ。最も好ましい運命。わしに最後の日をもたらす定めよ。それこそが最良の運命だ。もう明日の日は見るまい。

クレオン退場。

コロスの長が結びの言葉を述べる。

コロス長 知恵こそ幸せの最良のもの。そして神々への敬意は、永劫、決してうち捨てられてはならぬ。高慢な人間の言葉と行いは、手痛い打撃を受ける。それゆえに、年をとった時には、人は身を清め、賢くなるすべを学ばねばならないのだ。

コロスたち退場

(了)

【訳者注】

オイディプス：テーバイの先王。父を殺し、母と結ばれるというアポロンの神託が原因で、赤児の時に捨てられたが、他国の王に拾われた。成長して、自分の怖ろしい運命を知り、養父母を実の両親と信じていたために、神託を避けようと、放浪の旅に出る。テーバイ付近で車に乗った老人と争い、殺害してしまう。そして、人々を苦しめていた怪物スフィンクスを退治して、英雄として迎えられる。何者かによってテーバイ王ライオスが殺されていたので、その後を継ぎ、王妃イオカステを妻とする。何年もが過ぎた頃、テーバイに疫病が流行る。神託により、ライオス王殺害の犯人を捜していたオイディプスは、その犯人が自分であり、しかもライオスが自分の実父、イオカステが実母であった事を見いだす。逃れようとして、結局、神託通りの運命に陥ったオイディプスは、真実が見えなかった自らの両眼をくりぬいて、テーバイの町を去る。

ポリュネイケース、エテオクレス：

テーバイの先王、オイディプスの息子たち。二人は、父親の後を継いで、交代でテーバイの王位に就くことを約束した。しかし、先に王位についた弟のエテオクレスは誓いを破り、兄のポリュネイケースに王位を譲らないばかりか、彼を追放してしまった。復讐に燃えるポリュネイケースは、テーバイの敵国であったアルゴスに赴き、その軍勢を借りて、王位を譲れと、テーバイに攻め寄せてきた。これについてはアイスキュロス作『テーバイに向かう七将』を参照すると良い。この戦闘において、兄弟はその父親、オイディプスが彼らにかけた呪いの通りに、相打ちして死んでしまう。彼らがともに死んだために、兄弟の後見役であり、オイディプスの義弟にして叔父でもあるクレオンが、テーバイの王となった。

龍の子孫：テーバイ国民は、龍の歯から生まれた戦士達を先祖に持つと、言い伝えられている。

ハーデス：冥界の王なる神。ハーデスの花嫁になるとは、死ぬことを意味する。

アケロン：死者が冥界へ入るときにわたる河。仏教で言う、三途の川にあたる。

ティレシアス：ギリシア随一の預言者。両性具有者であった。ゼウスから、男性と女性では肉体的な喜びはどちらが大きいかと問われ、女性の悦びの方が大きいと答えたために、ゼウスの妻であるヘラ神に憎まれ、盲目にされる。このことを哀れに思ったゼウスは、彼に予言の力を授けた。オイディプス王に呼び出された時、その秘密を知っていながらも、伝えなかった。